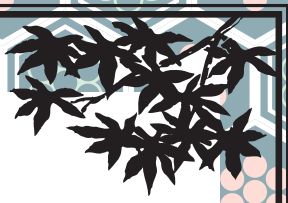


イベントなどへの参加の際は手洗いやマスク着用などにご協力ください



いずみさの昔と今 第321回

「郷土玩具と疫病除け」

9月17日(土)・12月11日(日)に開催される「ぜんこく縦断!郷土玩具展」と関連して、郷土玩具について、テーマを変え3回にわたり紹介していきます。

郷土玩具は、江戸時代から明治時代が最盛期で、子どもの遊び道具という面や、子どもの成長を祈り作られているという複数の面があります。その材料や特徴は、作られている地域の伝統や風土を反映しているものが多いです。今回は、その中でも「疫病除け」という面を持つ郷土玩具について紹介していきます。

まず、日本人のほとんどが知っているであろう福島県の郷土玩具の「赤ベコ」です。赤ベコの「ベコ」は、東北地方の方言で「牛」という意味がありその名の通り、赤い体の牛が、首をゆらゆらと揺らす姿がユーモラスな郷土玩具です。実は、この特徴的な赤色には重要な意味があります。赤色は、古

来より厄除け・病除けの色とされているということ、また、疱瘡が流行していた当時、疱瘡に罹らせる「疱瘡神」は赤色が嫌いと言われていました。このような理由からも、赤ベコの体がいかに重要な理由があるかと考えられます。疱瘡除けの郷土玩具は赤ベコの他にも、だるまや滋賀県草津の「狸々」、「鯛車」などがあり、それらは赤色に彩色されています。病魔除けとして有名な郷土玩具は、大阪にも存在します。大阪市の道修町にある少彦名神社で授与される「神農の虎」です。1820年代、大阪ではコレラという病が大流行しました。古くから薬屋が集まる町として有名であった道修町の薬屋たちは、虎の頭蓋などをもちいた「虎頭殺鬼雄黄圓(ことうさつきゆうおうえん)」という丸薬を作り、その丸薬と共に張り子の虎を配ったそうです。その丸薬はコレラによく効い

たことから、それ以降「神農の虎」は、疫病除けとして現代に続くまで信仰されています。このように、郷土玩具は、現代の玩具とは異なり、おもちゃという一面だけでなく、人々の祈りが込められているとみることができるといえます。今回は「郷土玩具と遊び」について紹介します。



▶赤ベコ(当館所蔵)

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの ☎469-7140 Fax469-7141 休館日 月曜日、毎月最終木曜日(いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館) 開館時間 午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで) 入館料 無料

日本遺産・北前船文化を巡る⑦ ~妙浄寺梵鐘~

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ~北前船寄港地・船主集落~」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介いたします。

問合せ 文化財保護課



日本遺産「北前船寄港地・船主集落」の構成文化財である妙浄寺梵鐘は、天和2(1682)年、豪商・唐金家が航海の安全を祈願して春日神社に奉納した鐘が、明治41(1908)年の神社合祀の際に妙浄寺に移されたものです。

梵鐘は江戸時代前期のもので、「唐金家釣鐘」とも呼ばれています。第二次世界大戦の供出を免れ、現在もその姿を残しています。市内に残る最古の梵鐘で、市指定文化財となっています。この梵鐘は唐金利範・利重・利興の兄弟が出資し、堺の職人が铸造しました。鐘の銘文は紀州藩の儒官であった榊原篁洲の撰とされています。また梵鐘を設置する建物である鐘楼は、大正時代に再建されたものです。

▶妙浄寺梵鐘

